研究ノート：近代イギリスにおける社会生活史の一齣

A Short History of Social Life in Modern Britain

長　島　伸　一
Shinichi Nagashima

はじめに

社会史研究が活況を呈している。従来の歴史研究が，経済や政治の分野で体系的な鳥瞰図を提出することを意図するものが多かったのに対して，近年のそれは，都市や地方に住む民衆の生活に視座をすえて，個別的な虫瞰図を積み重ねて歴史像の再構築を試みようとする傾向が強いといえる。じっさい，社会史を特集に組んだ雑誌が出されたり，社会史の専門誌が発行されていることが，それをなによりも雄弁に語っている[1]。また，フランスのアナール派の翻訳が続々と刊行されていることもその証左となろう[2]。

わが国におけるイギリス史研究は，経済史を中心に長い伝統を形作ってきた。しかし十数年前にその伝統的シェーマに「再検討」を要請したグループの中から，経済史プロパーの研究に留まらず社会生活史へと視野を拡げる研究者が輩出してきたことが，今日の歴史研究の活性化の一つの原因といえる[3]。しかも社会史の範囲は，例えば，庶民生活史，民衆運動史，文化史，都市史，女性史，地域史，教育史などに拡がりをもってきているのが現状である。

本稿は，近代イギリス史の一部分を，便宜上，商業革命期(1660年代～1770年代)，産業革命期(1770年代～1830年代)，ヴィクトリア朝期(1837年～1901年)の三期に区分し，それぞれの時期に従来の研究が明らかにした生活社会史上の史実を排列し研究の動向を探ることを課題としている。もとより対象とする期間は長く，紙幅は限られているので，ごく大ざっぱな概観を与えることしかできないが，小論の目的は，個別的領域の深部に分け入ることではなく，いわば通史的なアウトラインを描くことにあるという点をあらかじめおことわりしておきたい。

I　商業革命期の社会生活史

17世紀後半から18世紀最初の三分の二期までは，オランダやフランスとの重商主義戦争における戦勝を通じてイギリスの覇権が確立してゆく時代であり，この時期は，大航海時代をヨーロッパ商業革命期と呼ぶのに対して，イギリス商業革命期とも呼ばれている。マルクスが，「本源的蓄積」の主要契機として挙げた「植民制度，国債制度，近代的租税制度，保護貿易制度」などの重商主義的諸政策が体系的に整備されたのも17世紀の末期のことであった[4]。そしてこれらの政策の受益者は，「植民制度」の具体的法体系たる航海条例に守られつつ商業革命を推進した外国貿易商人と，イギリス革命期の議会を通じて「保護貿易制度」の基軸たる輸出奨励金制度（→穀物条例）を組織化したジェントルマン（地主貴族とジェントリ）であった。この時代に，大商人と大地主に代表される上層市民が先鞭をつけた奢侈的生活は，やがてそれを模倣し社会的上昇を図ろうとする中層市民をもまき込み「生活革命」へと展開していくことになる。それは衣食住も含めたあらゆる生活部面にわたることになるので逐次見ていくことにしよう。

商業革命の直接的効果は，言うまでもなく食生活の分野で顕著に現われた。それは「植民制度」がもたらした果実ともいうべきもので，非ヨーロッパ世界各地から新奇な商品群が流入し，〈第１次食事革命〉ともいうべき事態を呈することになる。17世紀中葉から18世紀初頭にかけて，西インド諸島から砂糖，レモン，オレンジが，中南米諸国か

らは，とうもろこし，じゃがいも，ピーナツ，トマト，ココアなどが，東インドや中国などアジア地域からは，紅茶，米，バナナ，すいか，桃などが，アラビアからはコーヒーが続々と輸入される。このうちとくに紅茶やコーヒーは，単に食生活の変化をもたらすにとどまらず，生活文化面での転換をひき起こすことになる。というのは，コーヒー・紅茶は，茶の卸売が普及する1720年代以前には，コーヒー・ハウスで飲まれ，そこに独自の文化が花を開いたからである。コーヒー・ハウスは，1650年に大学町オクスフォードで店開きしたのが最初と言われているが，その後わずか30年間のうちにロンドンで2,000軒とも3,000軒ともいわれる程の盛況ぶりを示した。その理由は，単に珍しい飲み物に対する嗜好の高まりというよりもむしろ，そこが情報交換や経済取引の場であり，新聞や雑誌の閲覧を通じた世論形成の場でもあったからである[5]。パイプ・タバコに代わって世紀交替期ごろ普及した嗅ぎタバコの習慣も，20年代に普及した富クジや競馬などギャンブル熱の高騰も，そのきっかけとなった南海泡沫事件[6]も，コーヒー・ハウスぬきに語ることはできない。

ところで，一般に，流行は上層市民の慣行を中・下層市民がまねることを通じて伝播する。上流気取りと訳されるsnobberyが流行の波及する原動力であったと見なすことができる。これによって，ジェントルマンのステイタス・シンボルであったステッキやアンブレラは，はやくも1760年代にはその象徴的意味を失うことになる。しかし，なんといっても流行の普及率が高いものの筆頭に位置するのは衣料品であろう。商業革命期を通じてインド産キャラコが大量に輸入され，世紀末には周知のキャラコ論争が繰りひろげられる。1700年のキャラコ輸入禁止法と1720年のキャラコ使用禁止法はその論争の帰結であるが，それらの法的規制にもかかわらず18世紀初頭にはコットン革命ともいわれる事態があらわれる。ドレスや下着に留まらず，シーツ，カーテン，ハンカチに至るまで綿製品が席巻し，海外から輸入された象牙や琥珀製の装身具と組み合わされてファッションの花を咲かせることになる。もっとも，綿製品が最下層を除く中・下層階級にまで均質化するのには，18世紀末期に成立するといわれるマス・マーケットの時代まで待たねばならないが，綿工業における機械化として画期をなす産業革命への胎動が，それ以前にコットンの国産化＝低廉化を通じて準備されていた点には注意しておく必要があろう[7]。

衣食の変革と並んで住宅および燃料に変化がひき起こされたのも商業革命期以降のことである。1665年にペストが大流行し[8]，翌年にはロンドンのシティの五分の四が消失するという大火[9]にみまわれたが，それを機に再建される家屋は，木造からレンガ造りか石造りに改められた。また，17世紀初頭以来，主として工業用燃料として徐々に石炭が使用されるようになり，レンガ工業とともにガラス工業なども興っていたため，それまで窓に用いられていた紙に変わって，窓ガラスが使用されるようになる。さらに工業用ばかりでなく家庭用燃料としても木炭からやがて石炭が用いられるようになると煙突が必要になり，それまで部屋の中央に作られていたいろりが暖炉に変わり壁面へと移されることになる。こうして庶民の生活空間に変革がもたらされるのと並行して，ロンドンの都市計画がレン（Sir Christopher Wren）の設計のもとで行われ，大火後首都のよそおいは一新されることになった。

17・18世紀の庶民生活は，さまざまな娯楽によって彩られている。例えば，ロンドン各地で毎年定期的に開かれた市（fair）もその一つで，バーソロミューの市（St. Bartholomew Fair）は，12世紀以来の伝統をもち，毎年旧暦の8月24日をはさんで数日間開催された。5月にはハイド・パークの東側で五月市（Mayfair）が開かれたし，テムズ川南岸沿いではサザックの市（Southwark Fair）が立った。最後にあげた市の模様は，「エッチング・ニードル〔銅版画〕のシェクスピア」と呼ばれた諷刺画家ホガース（William Hogarth, 1697-1764）の筆が生き生きと伝えている[10]。ロンドン以外では，13世紀にその起源をもつケンブリッジ近傍のスターブリッジの市（Sturbridge Fair）が有名である。また，冬期にテムズ川が氷結すると氷上市（Frost Fair）が開かれ，ロンドン橋の下には屋台が出て，馬車の競走や人形芝居なども行われたという[11]。

市とならんで庶民に人気を博したのは，闘鶏（二羽のシャモのどちらかの目が潰されるまで闘わせるギ

ャンブル)，闘犬，牛いじめ(長い縄で首をつながれた牛にグレイハウンド犬をしかけて噛みつかせる見世物)，熊いじめ，ネズミ殺しなど，動物愛護協会のお歴々が目をむきそうな動物虐待ゲーム(blood sports)であった。ホガースの作品「闘鶏場」にも，職業や階層のいかんを問わず雑多な観衆が一堂に会して熱狂している場面が写しとられているが，16世紀や17世紀初頭には，宮廷で外国大使歓迎用にそれらが催されたともいわれている[12]。

休日に人の集まる公園を散策し，公園内の売店でワインを飲み軽食をとる習慣も，この時期の庶民の楽しみの一つに数え挙げることができる。18世紀の30年代と40年代には，ヴォクソール遊園が改装されたり円形遊戯館で有名なラネラ遊園が開園され，60年代には，東洋風のパゴダの建つキュー・ガーデンや商店が軒を並べるフリート街が出現する。巨大都市ロンドンに点在する公園や商店街などの盛り場は，そこに集まる庶民の一人一人にとって，他人を「見る」場であり，同時に他人から「見られる」場でもあり，自分を「見せる」場でもあった。したがって，身分や階層秩序が混然一体となった都市——そこには閉じた「顔見知りの社会」とは異質の「匿名の社会」が出現している——でこそ，風俗や習慣が瞬時に伝播することになる[13]。

しかし，なんと言っても，庶民生活史をひもとくにあたって落とすことのできないのは飲酒の習慣であろう。そして飲酒の歴史ということになれば，パブ(public house)を抜きにして語ることはできない。「イギリスの歴史の多くは下院とともにパブで作られてきた」というのは少々オーバーな表現であるとしても，コーヒー・ハウス文化と並んでパブも独自の経済的・政治的・社会的な機能を有していたからである。

一口にパブと言っても，それは通称あるいは総称であって，実際にはいくつかのタイプに分類することができる。1830年代に成立した「ビール法」によってビールの販売が自由化された後にはビア・ハウス(beer house)が乱立するが，商業革命期に存在したパブは次の4つに分けることができる。(1)イン(inn)　駅馬車の中継点に建てられた宿屋兼居酒屋[14]。(2)タバーン(tavern)　13世紀にもその存在が認められるパブで，振りの客に酒と食事を供した。漱石は『文学評論』の中でこれを「酒肆」と訳して紹介している。(3)エールハウス(alehouse)　タバーンよりも格が落ちエール〔ビールより苦くてこくがあり6％程度のアルコール分を含む〕やビールとともに食事を供した酒場。(4)ジンショップ(gin shop)　食事は出さずジンだけをカウンターごしに販売した下層市民向けの酒場。

ところで，パブの独自の機能であるが，インが交通の要衝に建てられていたことからも推量可能なように，そこは毛織物や穀物などの商品取引場の役割を担っていた。しかしそればかりでなく，郊外のインは地方政治の場でもあり，またコンサート会場や品評会・展覧会の催物会場でもあった。またパブ経営者(publican)は，室内で各種のゲームや歌・芝居・ダンスなどを主催するほか，クリケットやボクシングなどのスポーツ競技を組織したり，既にふれた闘鶏をはじめとする伝統的な動物虐待ゲームのプロモーターでもあった[15]。そうであればこそ下層庶民が自分の家以外のところで時間を過ごそうとすれば，足が自然にパブの方に向かうということにもなったのである。

飲酒の習慣は，しかし生活苦に拍車をかけ，中毒や風紀紊乱などの社会問題をもたらす。ジンは，ジンショップで飲まれただけでなく，床屋・タバコ屋から食糧雑貨店・靴屋に至るまで，無数の商店で売られていたし，街頭の手押車でも手に入れることができた。再びホガースに登場してもらえば，18世紀中葉の作品「ジン横丁」(Gin Lane)には，泥酔のため赤ん坊を階段からとり落とす母親や，タンカがわりの手押車で運ばれる瀕死のアル中患者にまじって，赤ん坊を眠らせるためジンを飲ませる母親の姿などが描き出されているが，アルコールに対する熱い要求を抑制することは，飢えと貧困に喘ぐロンドンの貧民層にとっては至難のわざであったようである。

それと対照的であったのは，地方の貴族やジェントリまたロンドン在住の医師・牧師・芸術家などがバース(Bath)やタンブリッジ・ウェルズ(Tunbridge Wells)などの鉱泉(spa)で過ごす「社交季節」(the Season)の豪勢な賑わいであった。特に，ローマ時代の集落を再興して社交都市に変貌をとげたバースは，18世紀中頃にロンドンから馬車で3日を要したにもかかわらず，上流社会の

プレステージを味わおうとする奢侈的生活者たちでごった返した。市内には，コーヒー・ハウスや劇場は言うに及ばず，集会堂・舞踏会場・賭博場まで備わっており，――ホガースが連作「当世風結婚」の第1図でシニカルに描いたように――財は築いたが家系に見劣りのする新興資産家の娘と爵位はあるが財産が不足ぎみの没落貴族の息子とが，互いの両親たちの虚栄と貪欲の犠牲となる結婚契約場という一面すら備えていたという[16]。

このように，上層市民との較差は歴然としていたが，両者の中間に位置するさまざまな階層が存在していたことも事実であって，階層間較差が固定していたと見るのは正しくない。事実，次の産業革命期に企業家として成功し，中流階級(middle class，これはしばしば中産階級と訳されるが，かれらは押しも押されぬ大資産家である)の仲間入りを果たした人々が，無学文盲の徒弟職人出身者であった例はかなり多かったし，産業企業家やシティの大銀行家が1,000エーカ以上の土地を購入してスクワイア(squire)やジェントリになることもめずらしくなかった。もちろん，それをあまりに拡大解釈するのもまた危険であろうが，商業革命期や産業革命期が，予想以上に社会的流動化（社会移動）のはげしい時期であったことも忘れてはならないであろう。

II　産業革命期の社会生活史

18世紀の最後の三分の一期から1830年代までの数十年間は，イギリス経済史上，産業革命の時代とよばれている。産業革命の評価をめぐっては，周知のごとく，対照的な二つの説が並存している。一つは，この時代に生産力の急激な変化が起こり，国富が増大したにもかかわらず，労働者階級の生活水準は逆に低下したとみる革命説，非連続説，悲観説の立場。もう一つは，社会・経済的変化は前者が強調するほど革命的なものではなく，むしろ緩慢な推移を示し，この間大部分の労働者は雇用機会の上昇等によりその生活水準を向上させたとみなす連続説，楽観説の立場[17]。産業革命期の生活水準論争にここで立ち入る余裕はないが，賃銀や物価などの物質的要因のみならず社会生活上の変化からくる精神的要因をも考慮にいれて，前者の通説的立場に軍配をあげても差し違えの危険は少ないのではないかと思う。

ところで，よく知られているように，18世紀60年代後半から80年代にかけて，アークライト(Richard Arkwright）の水力紡績機（water-frame），ハーグリーヴズ（James Hargreaves）のジェニー紡績機(spinning-jenny)，クロンプトン(Samuel Crompton)のミュール紡績機(mule)，カートライト(Edmund Cartwright）の力織機（weaving engine）のいわゆる「四大発明」が行われ，綿工業における紡績・織布過程の機械化の第一歩が踏み出された[18]。その後，紡績以前の工程（打綿・梳綿・粗紡）と織布以降の工程（漂白・染色・捺染）の機械化が促され，その先駆性と自生的性格とを特徴にもつイギリス産業革命は，機械制大工業による労働の単純化を通じて，熟練労働を駆逐し資本による労働の包摂を事実上完成させたのである。

綿工業を起動力とする工業社会の出現は，製鉄業および炭鉱業の発展を促し，やがて30年代以降の鉄道時代をもたらすことになる。鉄道以前の道路交通は，古くから駅馬車および長距離定期馬車が主流を占めていたが，一般に道路事情は悪く，物と人の輸送には難渋を極めたようである。改善のきざしは，17世紀後半に始まる有料道路制度(turnpike system）によって与えられる。これは，道路維持費を教区民の負担から利用者に肩代わりさせようとするもので，それによって1770年頃には幹線道路網がほぼ完成したといわれている。またマカダム（John Loudon McAdam）やテルフォード(Thomas Telford）らによって[19]，道路舗装技術が一段と進歩し1820年代には馬車全盛時代を迎える。

都市化と工業化の波は，道路網の整備と並んで，運河建設をも促進した。1761年のマンチェスター―ワースリィ運河を皮切りに，石炭需要の増大に応じた運河建設ブームが到来し，90年代は「運河狂」時代とまで呼ばれた。河川をつなぐ運河によって，輸送費は陸上のそれに比べ大幅に低下し，A. スミスがいうように水運は広大な市場を産業界に開放したし[20]，また，運河技術の経験は，つづいて始まる鉄道建設への布石となった。ただし，皮肉なことには，水運はその積載能力や所要時間

の短縮に限度があることのために，鉄道時代の訪れとともに，その歴史的舞台から退かざるをえなくなったのであるが[21]。

時期的にはヴィクトリア朝期にズレ込むことになるが，ここで19世紀30年代から50年代にかけて現われた運輸・交通革命にふれておこう。いうまでもなく，世界で最初の鉄道は，1825年のストックトン―ダーリントン鉄道であったが，これは石炭輸送を主とするもので旅客を運ぶためのものではなかった。しかも，石炭を輸送する鉄道でありながら，会社が悲鳴をあげるほど石炭を消費したという。スピードも，平均時速12マイルで，当時の乗合馬車が時速10マイルで走ったといわれているから，水陸輸送の補完物にすぎなかった。それに終止符を打ち，旅客と貨物の大量輸送に新時代の時を告げたのが，1830年に開通したマンチェスター―リヴァプール間50マイル（約80km）の鉄道であった。開通式当日リヴァプール選出の代議士W. ハスキッソン（William Huskisson）が途中駅で対向列車にひき殺されるという不幸な事故の発生や，自己の領分を侵蝕されまいと必死の運河会社や有料道路会社が展開した鉄道公害反対闘争にもかかわらず，30年代と40年代には鉄道株への熱狂的な投資ブームが訪れる。こうした鉄道網の整備につれて，例えば都市と地方との較差が急速に縮まり，日帰り旅行が可能になり，職住一致の生活形態から通勤にともなう職住分離が一般化することになり，また，駅構内の書店と独特の貸本制度を媒介として，車中での読書の習慣が生まれるなど，産業革命後の社会にはさまざまな変化が現われる[22]。

経済学説の歴史のうえで古典派経済学の代表者とみなされているA. スミスとD. リカードは，経済社会の原理(principles)を解明するにあたって，地主（土地所有者）階級，産業資本家階級，労働者階級という「三大階級」からなる社会を想定している[23]。しかし，これはあくまでも理論的な想定であって，現実には，さらに複雑な階級ないし階層区分が可能であることは当のスミスやリカードばかりでなく多くの著述家の認めるところであった。例えば，1815年に出版されたある著作は，次のような階級分類のもとで，家族数と人口数とを推計している[24]。

階級	社会的地位または職業の具体例	家族数	人口数	人口比※
(1)	皇族，上院議員，上級公務員，男爵以上の貴族	576	2,880	0.02
(2)	准男爵，ナイト，地方ジェントリー，その他の高収入家族	46,861	234,305	1.37
(3)	高位の国教会聖職者，公務員，一部の弁護士・医師，一部の商人・製造業者・銀行家	12,200	61,000	0.36
(4)	(3)以外の教会および公務関係者，高位の非国教会系聖職者，(3)以外の弁護士・医師、教師、(3)以外の商人・製造業者，船舶・倉庫・店舗所有者，第2級のフリーホルダー，芸術家，相当の収入のある建築業者と技術者	233,650	1,168,250	6.83
(5)	下位のフリーホルダー，第2級の店舗所有者，イン・パブの経営者，その他相応の収入のある者	564,799	2,798,475	16.37
(6)	技術工，職工，手工業職人，農業労働者，家事使用人，その他労働に携わる者	2,126,095	10,072,723	58.94
(7)	救貧法適用者，無宿者，ジプシー，ごろつき，放浪者，その他定職のない者	387,100	1,828,170	10.69
(8)	軍関係者のうち将校・(休職および退職者を含む)	10,500	69,000	0.40
(9)	軍関係者のうち下士官および軍人(年金生活者を含む)	120,000	862,000	5.04
	総　計	3,501,781	17,096,803	100.02

※小数点以下第3位四捨五入

〔典拠〕P. Colquhoun, *A Treatise on the Weaith, Power, and Resources of British Empire,* pp. 106-7.

このうち，(1)(2)(8)はジェントルマン（地主階級，landlord class)，(3)(4)(9)が専門職を含めたブルジョアジー(middle class)，(5)がプチ・ブルジョアジー，(6)が労働者階級，(7)が受救貧民(paupers, the poor)と見なすこともできよう。人口の約6割を占める(6)の階層に含まれる，ある七人家族の農業労働者の1787年の家計簿によると，支出の7割強はパン代（小麦粉・イースト），1割強が紅茶・砂糖・バター代，肉はベーコンだけで1割にもみたない状態であったという。一般にエンゲル係数が高いほど生活状態はおもわしくないから，この家族の場合が(6)の階級を平均的に代表していると見なすことはできないかも知れない。事実，労働者階級の中でもトップクラスと目される都市の技術工の場合になると，かなりの生活水準を維持していたようである。時代はすこし下るが，1810年に4人家族のロンドンの植字工の家計を見ると，肉や野菜を充分摂り，黒ビールの消費量も多く，その家計簿の項目には衣料費や教育費，さらに共済組合費まで現われるからである[25]。しかし，それにしても，同じ19世紀初頭に，(1)から(4)までの約30万家族は，(6)に含まれる家事使用人（130万人弱）を単純平均しても4人以上雇う資力を持ち，(4)の階層でも平均年収は一般の農業労働者の20倍以上と見積られているから，上・中層階級と下層階級の生活水準の較差は想像以上のものであったといえよう。

したがって，政治的権利を持たず，それゆえ伝統的な暴動に訴える以外に不満を取り除く手段を持っていなかった都市や農村の労働者たちが，おびただしい数の騒擾を起こしたとしても驚くに当たらない。じっさい，1735年から1800年の間に275の民衆暴動が起こり，そのうち三分の二は飢餓への恐怖から発生したものであったといわれている。ロンドンでは，1768年にウィルクス暴動が，また1780年には，史上最も激烈で最も残酷に鎮圧されたゴードン暴動が起こっているし[26]，19世紀に入いると，ランカシャーはじめ各地で，「織布工の黄金時代」(1788-1803年)を短期間謳歌し，やがて機械の出現によって逆境に陥らざるをえなかった手織工による機械打ちこわし運動(Laddites, 1811-12年)が起こった[27]。これらの民衆運動とパンの価格との間には密接な関係があったことは明らかである。他方，これらの暴動に不安を感じ社会の安寧を望む声に促がされて，ピーター・ルー事件の10年後に，シルクハットに警棒を持った紺色制服隊がピール（Sir Robert Peel）の手によって創設されたのである。

ところで，この時期の民衆の教育程度はどのような状況にあったのだろうか。18世紀末葉までの英国の組織的教育制度として次のようなものを挙げることができる。(1)グラマスクール（grammar-school，古典語文法学校） 教会，ギルド，篤志家によって創立された無償の教育機関。6歳以上の男子に古典教育を通してごく基本的な知識を身につけることを目的にした。ただし，児童労働が家計を支えていた下層階級には無縁の制度であった。(2)慈善学校(charity-school) 聖書を教材に読み書きと服従の精神を訓育する目的で〈キリスト教知識振興協会〉が設立した学校。1730年代までに1500校以上設立されたが，その後教区や篤志家により授産学校に振り替えられた。(3)日曜学校(Sunday-school) 貧民児童を宗教的・道徳的無知から解放するためレイクス（Robert Raikes）によって1780年に設立され，その後急速に普及した無料の慈恵的教育機関[28]。これらのほかに，(4)ウェールズ農村の巡回学校，(5)非国教派のアカデミー，(6)職業的知識と技術習得のために教育的機能を果たした徒弟制および教区徒弟制などを数えることができる[29]。

要するに産業革命期のイギリスの組織的教育制度は，下層階級には宗教的立場から服従と忍耐を教え，中流階級には聖職者養成の道を準備することにあったが，貴族やジェントリの子弟は，家庭教師を通じて支配者としての知識と教養とを注入されるのが通例であった。ホッブス，ロック，スミスが貴族の子息の家庭教師を勤めたことは有名だが，その仕上げに大陸旅行（grand tour）が試みられそれに随行したこともよく知られている[30]。教育面でも階級間の較差は格段の開きがあったわけだが，19世紀中葉以降は，イートン（Eton）校，ラグビー（Rugby）校，ハロー（Harrow）校などに代表される寄宿制のパブリック・スクール（public school)が，エリート中等教育の組織的機関として機能することになる[31]。

この時代の支配階級である貴族・ジェントリの収入源は，いうまでもなくかれらの所有する広大な所領からあがる地代であった。一般に，地方の貴族が自己の所領内に構えた邸宅は豪壮そのもので，既にふれた子弟の家庭教師のほかに，さきの表で(6)の階級に含まれていた数多くの使用人（執事，女中，料理人，御者など）を雇い，ロンドンにも屋敷を構えるのが普通であった。上院議員はかれらの独占する無給の名誉職であったので，会期中はロンドンで，閉会中は地方の大邸宅で暮らすのが常であった。かれらの社会的威信を示すシンボルは，おびただしい数の召使い(servant, maid)と，狐や野うさぎなどの狩猟と，各界の名士を招いて開くディナー・パーティや舞踏会であった。

貴族に比べればそれほど富裕でもなく，その所有地も小さかったジェントリ（gentry）にしても，莫大な資産に恵まれていた点では貴族と変わるところはなかった。かれらの中には，下院に議席をもつものが多く，また各地の治安判事を兼ねていた。といっても，議員や治安判事がかれらの職業であったのではない。かれらは，すすんで働く必要のない有閑階級であったからこそ，こうした無償の義務を果たし，乗馬や狐狩りや会食などの日課をこなすことができたのである[32]。

商業革命期に「社交都市」として賑わったバースは，19世紀に入ると往年の勢いにかげりをみせはじめた。朝6時に始まり夜11時に終わる規則的で単調な生活に飽きた有閑階級が，スパー・タウンに変わるリゾート地として選んだのは，ブライトン（Brighton）やスカーバラ（Scarborough）をはじめとする海水浴場であった。当然のこととして，温泉地がたどった変化を，つまり保養地（health resort）から行楽地（pleasure resort）への転換を海水浴場も繰り返すことになる。その代表格ブライトンでは中国趣味の離宮や遊歩道や桟橋（pier）がつくられ，集会堂では音楽会や舞踏会が開かれるといった具合で，上流階級のための新しい「ロンドンの衛星都市」の機能を果たしていたといわれる[33]。もっとも，鉄道の普及と料金の低廉化によって，旅行の大衆化がもたらされることになると，日帰り客（day tripper）が増加し「社交都市」の風貌も再び変化することになるが，それはヴィクトリア中期以降のことである。

他方，これと対照的なのが労働者階級の生活であった。「18世紀の大部分をつうじて，大工業の時代に至るまでは，まだイギリスの資本は労働力の週価値を支払うことによって労働者のまる一週間をわがものにすることに成功していなかった」[34]が，機械制大工業の出現は，既によく知られているように労働者に過酷な労働条件のもとでの長時間労働と低賃銀とを強制した。機械化の進展による資本主義的管理の強化への鬱積した不満は，職場から解放された土曜の夜から日曜日にかけて解消する以外すべはなかった。一週間の勤めを終え週給を手にパブへくり出した労働者の給料袋は，一晩のうちに溶けて酒に化けかなり軽くなったといわれている。翌日も同じことを繰り返せば，月曜日は無断で欠勤するか遅刻するという「聖月曜日」(Saint Monday)の風習が一般化したのもうなずけよう。20年代から30年代にかけてスピリッツとビールの消費量がピークをなし，30年代はまたパブ全盛時代と言われているのも，産業革命期の労働強化を反映したものといえるわけである[35]。

III　ヴィクトリア朝期の社会生活史

1837年に始まるヴィクトリア女王の治世の直前から「大不況」の始まる1873年までの時期は，政治・経済史の上では，自由主義的改革期と呼ばれている。1832年には第一次選挙法の改正が行われ，産業革命の推進主体であった産業ブルジョアジーを中核とする中流階級にまで選挙権が拡張されたし，翌33年には，工場監督官制度をともなった工場法（Factories Regulation Act）が制定され，34年には労働者の移住の自由の保障を含む救貧法の改正（The Poor Law Amendment Act）が行われた。政治・経済上の自由主義的傾向は40年代以降にも引き継がれていることは，パーマストン時代のベルギーの独立援助をはじめとする各国の民族主義運動への援護外交，穀物条例や航海条例など重商主義的政策の廃止，原材料を中心とする輸入関税率の軽減などからも明らかである。しかし，資本主義下の自由主義は，ヨーロッパでは自由と独立のための運動を助けながら，アジアではアヘン戦争（1840-42年）とインドの直轄地化（1858年）とによって自由を抑圧することに抵触しない程度

のものでしかなかった点にも注意しておく必要がある[36]。

ところで，イギリスが，チャーティズムで荒れ狂った「飢餓の40年代」(the Hungry Forties) を脱し，ヴィクトリア朝の繁栄 (Victorian Prosperity) と Pax Britannica を本格的に謳歌するのは50年代に入ってからである。他国を農業国とする国際分業体制の下で，文字通り「世界の工場」として君臨してきたイギリスが，ユニオン・ジャックの国旗——それは白地に赤十字のイングランド旗と青地に白X十字のスコットランド旗を組み合わせてできた——の威力を世界に誇示する晴れの舞台，それが1851年ハイド・パークで開催されたロンドン万国博覧会 (the Great Exhibition) であった。当時の科学技術の粋を集めて会場に建設された鉄枠総ガラス張りの水晶宮 (Crystal Palace) がなによりもイギリスの威光を代弁していた。140日間の会期中の延べ入場者600万人，実質でも400万人を上回ったといわれているから，首都ロンドンの総人口の二倍を超える見物客が会場を訪れたことになる。これは，一つにはウィーク・ディの入場料を大衆料金〔1シリング〕に押えたこと，もう一つは，旅行業者クック (Thomas Cook) が往復割引切符を発売し，地方の観光客用に団体旅行を企画したのが好評を博したからであるといわれている。その意味で，世界で最初の万博は，折からの鉄道網の拡張によって旅行の大衆化のさきがけともなったわけで，現に1855年のパリ万博〔これは，53年のニューヨークにつぐ第3回万博。なおエッフェル塔は89年のパリ万博のさい作られた〕を契機に海外旅行ツアーも企画されるようになり，一部庶民に往年の貴族の習慣のミニチュア版を体験する道が拓かれたのである[37]。

万国博覧会が50年代以降の繁栄の象徴であり，その繁栄が実体をともなったものであったことは，労働者階級の生活水準の変容からも明らかであった。1850年を100として73年の貨幣賃銀が155，実質賃銀でも132という数字がそれを端的に物語っている。しかし，それに先立つ40年代は，E. チャドウィックの衛生報告書やF. エンゲルスの著作[38]が語っているように，労働者の状態が劣悪な職場環境と不衛生な生活環境でおおわれていた時代であったことは否定すべくもない事実であるし，また50年代にそれらが一気に解消されたとみることもできない。それは，例えば1858年に首都ロンドンで発生した「大臭気」(Great Stink) や H. メイヒューの手になる貧民調査報告[39]をひもとくまでもなく明らかである。

イギリスでは1801年から10年毎に国勢調査が実施されるようになり，統計の分野でも先進国を自負しうることになった。これにより都市化の実態は明らかになったが，下水施設の不備や給水の欠如など都市の衛生問題は，手つかずのまま放置された。1831年から翌年にかけてコレラが大流行した理由もそこにあった[40]。チャドウィックの報告書は，上下水道の整備と汚物の除去とを行政組織を通じて果たそうとするもので，この報告書に基づいて1848年には公衆衛生法 (Public Health Act) が成立する。しかし，衛生改革の実は思うようにはあがらなかったようで，10年後にテムズ川汚染に端を発する異様な「大臭気」——それはセポイの反乱の話題そっちのけの事態を引き起こしたという——がおそまきながら行政改革の断を下したといわれている[41]。

他方，エンゲルスの手になる「労働者の状態」に対する悲観的観察が，40年代という特定の時期に限定された観察どころか50年代以降にも妥当する観察であることは，メイヒューの貧困調査が実証している。彼はロンドンの総人口の40分の1にあたる5万人が街路で糊口をしのぐ大道商人 (Street-folk) であるとし，そのうちの3万人が呼売商人であったと見積っている。呼売商人より下層には，路地裏のゴミやがらくたを集める「くず捨い」，革の汚れを落とすために犬の糞を集めては鞣し皮業者にそれを売り払っていた「糞拾い」，下水溝で物をあさる「どぶさらい」，テムズ河岸の泥の中をあさる「泥ひばり」などがいたし，またロンドン・ドックには，木材荷揚げ人夫，シャベルで船倉へ底荷を入れる底荷人夫，船から石炭を背中に負って運ぶ石炭背負い人夫などがいた。彼らは安い簡易宿泊所に寝起きし，主な食事といえば，パン，じゃがいも，スープ，鰊，漬物と玉葱，ソーセージとプディング程度であったといわれている[42]。また，貧困と表裏の関係にある売春の統計によれば，1860年代のロンドンには，約3,000の売

春宿があり，推定8万にのぼるプロの売春婦のほかに数千の素人売春婦がいたという[43]。

しかし，ついでに指摘しておけば，メイヒューの調査によっても，貧困が社会問題として意識され改革の手がさしのべられたという事実はなかった。チャドウィックの報告が出てから都市衛生改革事業がその一応の成果を挙げるまでに約一世代を要したのと同様，貧困問題に対しても，産業革命を推進した支配階級はレッセ・フェール主義で臨んだのである。政府に重い腰をあげさせるきっかけを与えるまでには，19世紀末葉から20世紀初頭にかけてあいついで出版されたC. ブースとS. ラウントリーの二つの社会調査報告[44]を待たねばならなかったのであり，その時にはすでに大英帝国の威信にはかげりが見えはじめていたのである。

極貧層に比べると一般の労働者階級の暮らしはまだましであった。1840年頃のロンドンの半熟練労働者（5人家族）の家計をみると，週支出15シリングの内訳は60%が食費で，食費の50%がパンとじゃがいも，肉は22%を占めている。家賃の全支出に占める割合が17%，わずかながら教育費にも支出されている。同じ頃のランカシャー綿工業で働いていた熟練労働者（6人家族）の場合には，週賃銀も1ポンド1シリング1ペンス半と高い。そのうち70%が食費で，食費の41%がパンとじゃがいもとオートミール，肉とベーコンは17%を占め，総支出に対する家賃の比率は14%であった[45]。同じ40年代に，バーミンガムの労働者が，平日には厚切りや切り身の肉を食べ，日曜には特別上等な骨付き肉を食べていたという記録もあるが，70年代になってもマンチェスターの下層労働者は，安いオートミールとじゃがいもと紅茶が普通で，ベーコンなどの安い肉でも週3度位がせいぜいだったとする推測もある[46]。いずれにしても，一般労働者の食生活に変化が現われるのは，60年代に始まる〈第二次食事革命〉が仕上げを迎える80年代以降のことであって，その頃になってようやく，人造バター（マーガリン）やオーストラリアから冷凍船で輸送された牛肉・羊肉や新鮮な魚が食卓をにぎわし，食品保存技術の進歩によって，肉や果物のかん詰めやジャムのビン詰めが現われる[47]。

ヴィクトリア朝の時代においても，労働者の暮らしの中でコーヒー・ハウスやパブが果たす役割は大きかった。コーヒー・ハウスは，19世紀中葉でもロンドンに2,000軒あったと言われており，新聞や雑誌やダイジェスト版の手軽な書物の読書施設として庶民に利用されていた[48]し，6人のチャーティストが「人民憲章」（the People's Charter）を採択するために選んだ会合の場がBritish Coffee Houseであったことからも明らかなように，社会運動家グループの例会場としても機能していた[49]。一方，パブは20年代の福音主義勢力による節酒運動にもかかわらず30年代には全盛期を迎え，43年の「劇場法」によって歌と踊りを専門とするミュージック・ホール（music hall）がパブから独立した後も大いに賑わった。というのは，ヴィクトリア朝のパブは，かつてのリクリエーション・センターとしての役割に加えて労働組合や友愛協会の集会所としても利用され，また「葬式互助会」など一種の共同積立て組織や職業紹介所としての機能をも兼ねていたからである[50]。

時代が下ればそれにつれてレジャも多様化して大衆化する。1867年に土曜半日制が全工場で採用され，71年の「ラボック法」によって年4回の「銀行休業日」（Bank Holiday）が法制化されると，折からの鉄道の普及や実質賃銀の上昇と相まって，労働者にとっても日帰り行楽旅行は夢ではなくなった。かつての残酷な動物虐待ゲームに代わって，ダービーやオークスなどの競馬観戦や70年代にはプロ・フットボールの観戦が土曜の午後の娯楽として定着したようだし，パブが若い女性をつれていけるような上品なものに変質していった[51]。世紀末には，上流階級には豪華なホテルのレストランやバーが人気の的であったが，労働者たちは，古いモラスの批判や政治諷刺を盛り込んだバラエティ・ショーのかかるミュージック・ホールで日頃の溜飲を下げていたようである[52]。

労働者階級に対してミドルクラスの生活はこれとはかなり異質なものであった。中流階級といえば誰でもまず，産業資本家や富裕な大商人やマーチャント・バンカーに代表される金融業者などを想い浮かべるだろう。しかし，そのほかに，法律家（弁護士）や医師（内科医）など旧くから存在した専門職や，19世紀中葉以降急増した機械技師や

土木技師などの技術関係者，企業規模の拡大にともなって発生した会計士，ベンタム主義者の提唱により1870年代に広く行われるようになった文官登用試験制度——これは中国の科挙制度をモデルにしたといわれている——の施行後急増した政府関係官吏などの新しい専門職[53]をもこれに含めるのが普通である。ヴィクトリア期のミドルクラスのメルクマールは，主婦が家事労働から解放されているかどうか，つまり家事奉公人を雇う収入があったかどうかにかかっていたといってよい[54]。かれらは1859年に出版されたちまちベスト・セラーとなったS. スマイルズの『自助論』[55]が問いたように，刻苦勉励を旨とし怠惰を悪徳と見なす階級であり，その点が労働とは無縁で政治を片手間にしながらレジャー三昧の暮らしをしていた上流階級との違いであった。もっとも，資産を蓄えたミドルクラスの目標は，鉄道網の拡大にともなう地価高騰にもかかわらず土地を購入しジェントルマンになることに置かれていたし，かれらの特徴の一つに数えられる厳格な非国教主義もやがてはアングリカン・チャーチに同化される傾向も見られたようではあるが[56]。

19世紀中葉の中流階級の年収は，ざっと見積って200ポンドから1,000ポンドほどであった。時期的には少し以前になるが1823年の一資料によると，年収1,000ポンドの5人家族の家計支出は，食費と光熱費（石炭・ローソク代）と石鹸代などをあわせた基礎的生計費33%，召使と馬車の維持費22%，被服費12%，家賃・税金など12%，接待費・医療費など3%，教育費4%，貯金10%，雑費4%となっていた。また，1857年の年収1,000ポンドの家族の基礎的生計費35%の内訳を見ると，肉類と魚に30%があてられ，野菜(5.7%)，ビール(5.7%)，イタリア食品（2.3%）などのほかにブドウ酒などの酒類に14.3%が割り当てられている。石炭・灯油などの光熱費に10.5%，洗濯代に11.4%が計上されているのも注目される[57]。こうした数字をたよりに中流階級上層の理想的家庭像を描くとすれば——清潔な衣服に身をつつんだ家族が明るく暖かい住居内で数多くの召使いにかしづかれながら豪勢な食事をし，友人家族を接待してパーティを開き，貯金の一部をはたいて定例休暇をリゾート地で過ごし，休日には馬車を駆りたてて郊外への散策を楽しむといった——1870年代に一世を風靡したHome Sweet Homeのメロディに象徴されるような——家庭像を浮かび上がらせることが可能であろう。

ところで，中流階級の学校教育に対する態度はどのようなものであったのだろうか。厳格な古典教育を通じてジェントルマンの統治能力の涵養と教養を身につけることを本義としていた寄宿制のパブリック・スクールは，年間200ポンドの授業料を要したといわれているから，よほどの余裕がないかぎり，中流階級にとっても高嶺の花であった。それでも1840年以降に110校のうちのほぼ半数にあたる47校のパブリック・スクールが新設されているから，上流階級の子弟にならって富裕な中流階級の子弟にもエリートの地位を手に入れさせる手段が講じられていたことはまちがいない。しかし当時就職には縁故関係が幅をきかせていたため，コネと無縁の中流階級の子弟にとっては，資格を取って専門職に就くことが出世の道であった。このような上級専門職を志望する中流階級の要望に答えパブリック・スクールに対抗すべく各地に設立されたものが，出資者経営学校（proprietary school）と呼ばれるものであった。その生徒数は，1868年には寄宿生約4,600人，自宅通学が約7,600人に達したと言われている。中流階級上層の娘には，貴族やジェントリの娘と同じように，住込みの女家庭教師（governess）がつけられることもめずらしくなかったが，40年代後半からは，ごくわずかではあったが女性にも出資者経営学校の門戸が開かれたようである[58]。

ヴィクトリア期においても，政治上のゆるぎない支配権はジェントルマンの手に握られていたように見える。かれらの収入源であった所領は，3,000エーカから10,000エーカ，最低のランクでも1,000エーカ（120万坪）は持っていたといわれる。1870年代の調査によると，400人の貴族が全所有地の17%を，約1,300人の地主（3,000エーカ以上の所領）が25%を，そして約2,500人の小地主(1,000～3,000エーカの所領)が13%をそれぞれ所有していたという。したがって，貴族とジェントリあわせてわずか4,200人(全人口の0.44%)が，全所有地の55%を占拠していたということになる[59]。これら上流階

級の生活は，ヴィクトリア時代においても，すでに産業革命期の項で見たところとほとんど変わりはない。要するに，普通1エーカにつき1ポンドと見積られる莫大な地代収入を裏付けとして，狐狩りやクリケットや盛大なパーティを行い，これらの日課に支障をきたさない範囲で，中央の議員職や地域の治安判事職といった名誉ある義務を果たしていたのである。かれらの子弟は，パブリック・スクールからオックス・ブリッジの門をくぐり，やがて長男は長子相続制によって土地財産を継承し，次三男は国教会の聖職者や陸軍将校になるケースが多かったが，いづれにしてもかれらは中流階級の自助の精神や出世競争や拝金主義を白い目で眺め，ミドルクラスとは一線を画していたのである[60]。

しかし念のために付け加えておけば，ヴィクトリア朝の地主階級が政治上の支配権を掌握していたからといって，かれらが経済社会の支配階級でもあったと考えるのは早計である。確かに，この時期にもあい変わらず議員の多数は地主で占められていたことは事実だし，1846年の穀物条例廃止によって政治上の影響力が薄められてから後30年間がじつは「地主政治」の最盛期であった，とまで言われることもある[61]が，そうした表面的な事実をもって中流階級の中核に位置していた産業ブルジョアジーの政治・経済社会に及ぼす支配力を過小評価することはできないからである。かれらは，産業革命期いらい，各地に商業会議所や工業会議所などの院外組織を結成し，やがてそれらの全国組織は地主議会に対してプレッシャー・グループとしての機能を果たしうるまでに成長したのである。したがって，産業ブルジョアジーは，1832年の第1次選挙法改正以降も，直ちに議会へ進出せずとも，労働者階級をもまき込みながら，「国民的利益」の旗をかかげて自己の利害（政策）を実現しえた点を軽視することはできない。

以上のような脈落で，史家が時折引用する，1860年代に発せられたある大工業家のつぶやき——これは，フランス人H. A. テーヌの著書[62]に紹介されたものだが——に耳を傾ければ，ヴィクトリア朝社会の支配権が表面上はジェントルマンに属しながら，実質的には産業ブルジョアジーの側に移っていたことを充分読みとることができるであろう。

「私たちの目的は，貴族の支配をひっくり返すことではないのです。私たちは，これからも，政府と国家の要職をかれらの手に委ねるでしょう。というのも，私たち中流階級の人間は，国家の仕事を遂行するためには，特別な人間，つまり何代にもわたってその仕事のために生まれ，かつ育った人々で，しかも大局的な視野から自らの判断で行動できる地位にある人々がどうしても必要だということが，よくわかっているからです。彼らをして統治せしめよ。ただし，統治するにふさわしからしめよ（Let them govern, but let them be fit to govern.）」

限られた紙幅の中で，いそぎ足で近代イギリスの社会史的側面のアウトラインを記してきたが，最後に，注でもふれておいた夏目漱石の『文学評論』からの引用で本稿を閉じることにしたい。彼は，1905（明治38）年9月から1年半に亘り東京帝国大学で「18世紀英文学」を講ずるにあたり，文学史の講義が「魚から骨だけ切り取ったようなもの」であってはならない，との立場を明確にしている。小説は「社会そのものを写して」「社会の光景が眼前に浮ぶ」ものでなければならず，「社会を感ずる」ものでもなければならない，という漱石に独自の小説観は，対象こそ異なるとはいえ，80年後の現時点で社会科学を学ぶ前提として歴史そのものを論ずるにあたっても傾聴すべき響きを失っていないように思われる。（1985年1月30日）

注

(1) 『思想』663号，1979年9月。『経済評論』第32巻10号，1983年10月。また『社会経済史学』第44巻4号（1979年1月）は第47回大会特集号として「アナール」学派の特集を組んでいる。1982年に創刊された『歴史と社会』（リブロポート）と『社会史研究』（日本エディタースクール出版部）は，ともに現在第5号まで刊行されている。

(2) E. Le Roy Ladurie『新しい歴史——歴史人類学への道——』（Le territoire de l'historien, 2 Tomes, 1973/78. 樺山紘一他訳，新評論，1980年），P. Ariès『"子供"の誕生——アンシァン=レジーム期の子供と家族生活』（L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime, 1960. 杉山光信・杉山恵美子訳，みすず書房，1980年）。

(3) 『講座世界歴史』（全31巻，岩波書店，1969年～

1974年）の近代イギリス史部分（執筆陣は，越智武臣，篠塚信義，今井宏，川北稔，松浦高嶺，角山栄，村岡健次，竹内幹敏の諸氏），およびそれをめぐって開催された1971年11月の史学会大会・西洋史部会のシンポジウムの記録『近代イギリス史の再検討』（御茶の水書房，1972年）を参照。また，いわゆる「再検討」派による著作として，『イギリス史研究入門』（山川出版社，1973年），『講座西洋経済史』（全5巻，うち近代は最初の2巻，同文館，1979年），『概説イギリス史』（有斐閣選書，1982年）などがある。イギリス史研究刊行会の機関誌『イギリス史研究』（第35号まで既刊）もその一貫とみなしうる。

(4) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke* Bd. 23, Absch. 7, Kap. 24.（『マルクス・エンゲルス全集』第23巻〔『資本論』第1巻〕，第7篇24章6節）。

(5) コーヒー・ハウスについては，A. Ellis, *The Penny Universities : A History of the Coffee-Houses*, 1956. B. Lillywhite, *London Coffee Houses*, 1963. 角山栄『産業革命と民衆』河出書房，1975年。同『茶の世界史』中公新書，1980年。小林章夫『コーヒー・ハウス』駸々堂，1984年。木村栄一『ロイズ——世界最大の保険市場』日経新書，1981年などを参照。紅茶については，D. Forrest, *Tea for the British : The Social and Economic History of a Famous Trade*, 1973. 出口保夫『英国紅茶の話』東京書籍，1982年を参照。

(6) cf. V. Cowles, *The Great Swindle : The Story of the South Sea Bubble*, 1960.（大橋吉之輔訳「南海の泡沫」『世界ノンフィクション全集』第43巻，筑摩書房，1963年）。

(7) 詳しくは，川北稔「奢侈禁止法の時代」（『経済評論』1983年10月），同「奢侈禁止法からキャラコ禁止法へ」（『歴史と社会』第4号，1984年6月），同『工業化の歴史的前提』岩波書店，1983年，第11章を見よ。

(8) W. G. Bell, *The Great Plague in London in 1665*, 1924.

(9) W. G. Bell, *The Great Fire of London in 1666*, 1920. ペストやロンドン大火については，それらを直接体験したピープスやイーヴリンの『日記』が参考になる。R. Latham and W. Matthews (ed.), *The Diary of Samuel Pepys : A New and Complete Transcription*, 11 vols., 1970-83. E. S. de Beer (ed.), *The Diary of John Evelyn*, 6 vols., 1955. また，臼田昭『ピープス氏の秘められた日記』（岩波新書，1982年）も見よ。

(10) 森洋子編著『ホガースの銅版画——英国の世相と諷刺——』岩崎美術社，1981年。ホガースのわが国への紹介者として夏目漱石の名を逸することはできない。『文学評論』（1909年刊。『漱石全集』第15巻，角川書店，1961年，所収。講談社学術文庫版，全3冊，1977年）第2編参照。

(11) C. Walford, *Fairs, Past and Present, A Chapter in the History of Commerce*, 1883.（中村勝訳『市の社会史』そしえて，1984年）。C. Hibbert, *London : The Biography of a City*, 1969, ch. 8.（横山徳爾訳『ロンドン』朝日イブニングニュース社，1983年）。

(12) R. J. Mitchell and M. D. R. Leys, *A History of London Life*, 1958, ch. 6.（松村赳訳『ロンドン庶民生活史』みすず書房，1971年）。

(13) 川北稔「見せ物としての都市」（樺山紘一・奥田道大編『都市の文化』有斐閣選書，1984年，所収）参照。18世紀の都市生活については，cf., C. Hibbert, *op. cit.*, chs. 9-11. R. J. Mitchell and M. D. R. Ley, *op. cit.*, chs. 9-12. G. Rudé, *Hanoverian London 1714-1808*, 1971. M. D. George, *London Life in the Eighteenth Century*, 1925.

(14) cf. A. Everitt, The English Urban Inn 1560-1760'S, in Everitt ed., *Perspectives in English Urban History*, 1973. J. A. Chartres, The Capital's Provincial Eyes : London's Inn in the Early Eighteenth Century, *London Journal*, vol. 3, No. 1, 1977.

(15) H. C. Shelley, *Inns and Taverns of Old London*, 1909. 海野弘『酒場の文化史』サントリー博物館文庫，1983年。見市雅俊「パブと飲酒」（角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国』平凡社，1982年，所収）。

(16) D. Gadd, *Georgian Summer : Bath in the Eighteenth Century*, 1971. F. Anderson, *The Inland Resorts and Spas of Britain*, 1973.. 川島昭夫「リゾート都市とレジャー」（角山・川北編前掲書，所収）。

(17) 矢口孝次郎『産業革命研究序説』ミネルヴァ書房，1967年。

(18) 産業革命期の発明家については，W. H. Chaloner, *People and Industries*, 1963（武居良明訳『産業革命期の人びと』未来社，1967年）。角山栄『産業革命の群像』清水書院，1971年。小松芳喬『産業革命期の企業者像』早稲田大学出版部，1979年を見よ。

(19) cf. R. Devereux, *John Loudon McAdam*, 1936. L. T. C. Rolt, *Thomas Telford*, 1958. W. H.

Chaloner, *op. cit.*, chs. 6-7.

(20) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, Bk. I, ch. 3（大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫，第1編第3章）。

(21) 道路・運河・機械の技術史的考察として，C. Singer, E. J. Holmyard, A. R. Hall and T. I. Williams, *A History of Technology*, 5 vols., 1954-58（高木純一他訳『技術の歴史』全10巻，筑摩書房，1962-64年）. T. K. Derry, T. I, Williams, *A Short History of Technology from the Earliest Times to A. D. 1900*, 1960, chs. 11, 13, 15, 19（田中実・平田寛訳『技術文化史』上・下，筑摩書房，1971-72年）がある。

(22) cf. H. Perkin, *The Age of the Railway*, 1970. R. H. G. Thomas, *The Liverpool & Manchester Railway*, 1980. W. Schivelbusch, *Geschichte der Eisenbahnreise : Zur Industrialisierung von Raum und Zeit im 19. Jahrhundert*, 1977（加藤二郎訳『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局，1982年）。小池滋『英国鉄道物語』晶文社，1979年。

(23) A. Smith, *op. cit.*, Bk. I, ch. 11, Conclusion of the Chapter. D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation*, 1817, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. 1, Preface（堀経夫訳『経済学および課税の原理』雄松堂書店，1972年）。

(24) P. Colquhoun, *A Treatise on the Wealth, Power, and Resources of the British Empire*, 1815. Rep., 1965. 以下の叙述は，D. Davies, *The Case of Labourers in Husbandry stated and considered*, 1795 を典拠とした加藤祐三『イギリスとアジア』（岩波新書，1980年）に依った。

(25) J. Burnett, *Plenty and Want : A Social History of Diet in England 1815 to the Present Day*, 1966. 荒井政治「白いパンと一杯の紅茶」（角山・川北編前掲書，所収）

(26) G. Rudé, *The Crowd in History : A Study of Popular Disturbances in France and England 1730-1848*, 1964. Rev. ed., 1981, chs. 2-3（古賀秀男他訳『歴史における群衆』法律文化社，1982年）. C. Hibbert, *op. cit.*, ch. 11.

(27) J. L. and B. Hammond, *The Skilled Labour 1760-1830*, 1919, chs. 4-5. E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963, ch. 9. M. Thomis, *The Luddites*, 1970. G. Rudé, *op. cit.*, ch. 5.

(28) A. Gregory, *Robert Raikes : Journalist and Philanthropist, A History of the Origin of Sunday Schools*, 1877. 永田正臣「イギリス産業革命期における労働階級児童の教育」『駒沢大学経済学部研究紀要』41，1983年3月。

(29) cf. W. H. G. Armytage, *Four Hundred Years of English Education*, 1964. 2nd ed., 1970. G. W. Roderick and M. D. Stephens, *Education and Industry in the Nineteenth Century*, 1978. 尾形利雄『産業革命期におけるイギリス民衆児童教育の研究』校倉書房，1964年。成田克矢『イギリス教育政策史研究』御茶の水書房，1966年。

(30) 本城靖久『グランド・ツアー』中公新書，1983年。

(31) H. C. Barnard, *A History of English Education from 1760*, 1961. T. W. Bamford, *Rise of the Public Schools : A Study of Boy's Public Boarding Schools in England and Wales from 1837 to the Present Day*, 1967. 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房，1980年，第2部第1章。望田研吾「19世紀におけるパブリック・スクールの発展」『島根大学教育学部紀要』15，1981年12月。

(32) cf. H. Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution c. 1780 - c. 1880*, 1980. S. Margetson, *Leisure and Pleasure in the Nineteenth Century*, 1969. G. M. Trevelyan, *English Social History : A Survey of Six Centuries. Chaucer to Queen Victoria*, 1944, chs. 13, 16（松浦高嶺・今井宏訳『イギリス社会史』2，みすず書房，1983年）。

(33) cf. G. M. Trevelyan, *op. cit.*, ch. 16. 川島前掲論文参照。

(34) K. Marx, *op. cit*, Absch. 3, Kap. 8.

(35) 角川栄『時計の社会史』中公新書，1984年。

(36) 吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波新書，1975年および加藤前掲書参照。

(37) C. R. Fay, *Palace of Industry, 1851 : A Study of the Great Exhibition and its Fruits*, 1951. R. J. Mitchell and M. D. R. Leys, *op. cit.*, ch. 15. C. Hibbert, *op. cit.*, ch. 12. 春山行夫『万国博』筑摩書房，1967年。鈴木博之『ジェントルマンの文化』日本経済新聞社，1982年。吉田光邦『万国博覧会』日本放送出版協会，1985年。角山栄『産業革命と民衆』（前掲）。

(38) E. Chadwick, *Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain*, 1842.（Rep. M. W. Flinn ed., 1965.）チャドウィックとその時代については，R. A. Lewis,

Edwin Chadwick and the Public Health Movement 1832-54, 1952. S. E. Finer, *The Life and Times of Sir Edwin Chadwick*, 1952を見よ。F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 1845, in *MEW*, Bd. 2（岡茂男訳「イギリスにおける労働者階級の状態」『全集』第2巻，所収）。

(39) H. Mayhew, *London Labour and the London Poor*, 1 sted., 3 vols., 1851. Enlarged ed., 4 vols., 1861-62. Rep., 1967.

(40) R. J. Morris, *Cholera 1832 : The Social Response to an Epidemic*, 1976.

(41) 村岡健次「病気の社会史」（角山・川北編前掲書，所収）。同「都市と水の社会史」『経済評論』32-10，1983年10月。澤田庸三「ビクトリア時代初期の都市問題」『都市問題研究』29-11，1977年11月。

(42) H. Mayhew, *op. cit.* and cf. C. Hibbert, *op. cit.*, ch. 13. メイヒューの紹介として，A. Humpherys, *Henry Mayhew*, 1984. 角山栄『産業革命と民衆』（前掲）。小池滋『ロンドン』中公新書，1978年。川成洋・石原孝哉『ロンドン歴史の横道』三修社，1984年などがある。

(43) C. Hibbert, *op. cit.*, ch. 13.

(44) C. Booth ed., *Life and Labour of the People in London*, 1 st ed., 2 vols., 1889-91, 2 nd ed., 9 vols., 1892-97. 3rd ed., 17 vols., 1902-03. S. Rowntree, *Poverty : A Study of Town Life*, ¢801. 二人の調査の紹介として cf. T. S. and M. B. Simey, *Charles Booth. Social Scientist*, 1960. A. Briggs, *A Study of the Works of Seebohm Rowntree 1871-1954*, 1961. 荒井政治『近代イギリス社会経済史』未来社，1968年。

(45) J. Burnett, *op. cit.* 荒井前掲論文参照。

(46) W. J. Reader, *Life in Victorian England*, 1964, ch. 5（小林司・山田博久訳『英国生活物語』晶文社，1983年）。

(47) 角山栄「家庭と消費生活」（角山・川北編前掲書，所収）。

(48) cf. R. K. Webb, *The British Working Class Reader 1790-1848*, 1955.

(49) G. D. H. Cole and A. W. Filson, *British Working Class Movement, Select Documents, 1789-1875*, 1951, ch. 14（浜林正夫・篠塚信義・鈴木亮編訳『原典イギリス経済史』御茶の水書房，1967年）。

(50) W. J. Reader, *op. cit.*, ch. 5. 見市前掲論文。加藤前掲書第8章。

(51) cf. W. J. Reader, *op. cit.*, ch. 6.

(52) ヴィクトリア期のレジャーについては，cf. B. Harrison, *Drink and the Victorians*, 1975. P. Bailey, *Leisure and Class in Victorian England : Rational Recreation and the Contest for Control, 1830-1885*, 1978. H. Cunningham, *oq. cit.*. 川島昭夫「19世紀イギリスの都市と『合理的娯楽』」（中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房，1983年，所収）。同「イギリス人の日曜日」『経済評論』32-10，1983年10月。

(53) cf. W. J. Reader, *op. cit.*, ch. 7. do., *Professional Men : The Rise of the Professional Classes in Nineteenth Century England*, 1966.

(54) cf. P. Horn, *The Rise and Fall of the Victorian Servant*, 1976. 河村貞枝「ヴィクトリア時代の家事使用人」（角山・川北編前掲書，所収）。18世紀については，cf. J. J. Hecht, *The Domestic Servant Class in Eighteenth-Century England*, 1956.

(55) S. Smiles, *Self-Help, with Illustrations of Character and Conduct*, 1859（中村正直訳『西国立志編』，初版1871年，講談社学術文庫，1981年）。

(56) W. J. Reader, *Life in Victorian England*, ch. 8.

(57) cf. J. A. Banks, *Prosperity and Parenthood : A Study of Family Planning among the Victorian Middle Classes*, 1954. 村岡前掲書，第2部第2章。

(58) cf. W. J. Reader, *op. cit.*, ch. 7. 望田前掲論文。原剛「19世紀英国の教育と労働階級の社会移動」『思想』691，1982年1月。

(59) cf. F. M. L. Thompson, *English Landed Society in the Nineteenth Century*, 1963. 村岡前掲書，第2部第2章。

(60) cf. W. J. Reader, *op. cit.*, ch. 2.

(61) *ibid.*

(62) H. A. Taine, *Notes sur l'Angleterre, 1871. Notes on England*, transl. by W. F. Rae, 1885, transl. by E. Hyams, 1958.